水津幸恵（著）
『保育の場における子どもの対人葛藤―人間理解の共感的まなざしの中で―』
2020 年　ミネルヴァ書房　A5 判　208 頁　定価（本体 5,000 円＋税）

岡南 愛梨*

他者とのかかわりの中では、喧嘩やいざこざといった対人葛藤が生じる。様々な出来事や感情のもつれの中で生じるそれを、私たちはしばしば、「善悪」や「何が正しいのか」といった道徳的な判断基準に頼り解決しようと試みてしまう。本書は、さまざまな人と出会いかかわり合う保育の場において子どもたちの生活の中で生じる対人葛藤の意味と、それを支える保育者のまなざしについて、倉橋惣三とネル・ノディングズの理論を援用し、論じている。従来の個体能力主義的な道徳論とは異なる「人間理解の共感的まなざし」の中で、子どもたちの主体的な生活にて生じる対人葛藤の保育実践的意味を、丁寧に描き出した一冊である。

本書は、2019 年にお茶の水女子大学に提出された博士論文をもとに、加筆修正を加え刊行されたものである。本書は、序章、第 I 部（第 1 章から第 3 章）、第 II 部（第 4 章から第 6 章）、そして終章から構成されている。まず序章では、これまで対人葛藤が、発達を促し道徳性を培う機会として捉えられてきたことを確認した上で、子どもたちの個別具体的な生活の中で対人葛藤を捉えようとする保育者のまなざしからは、発達における意義とは異なる意味が見えてくる可能性について論じている。そして、そのような保育者のまなざしを記述するために、倉橋惣三の保育思想とネル・ノディングズのケアリング論に着目することを説明している。

第 I 部では、倉橋の保育思想とノディングズのケアリング論における共通性を考察し、そこに通底する「人間理解の共感的まなざし」を指摘している。第 1 章では、 1926 年『教育講話』における「喧嘩」の詳述と 1949 年の雑誌『幼児の教育』における連載「和の教育」を検討し、倉橋がどのように対人葛藤を捉えていたのかを示している。倉橋の保育思想においては、喧嘩という対人葛藤が、生来的に人がもつ、自分を生存させようとする「自発性」の現れとして考えられていた。著者は、倉橋が対人葛藤を道徳性の発達と結びつけるのではなく、生活の中でぶつかり合いながらも助け合ったり手加減をしたりする子どもたちのかかわりの様相に着目していたことを示している。

第 2 章では、倉橋の道徳教育に関する先行研究を検討し、その後 1953 年の雑誌『幼児の教育』における連載「人間性の涵養」の内容から、倉橋の道徳教育に対するスタンスを明らかにしている。倉橋の考える人の根本的な「人間性」とは、葛藤ではなく、友達とのささやかなあたたかいかかわり合いの中で涵養されるものであることを説明し、ゆえに倉橋の保育思想において対人葛藤と道徳性が結びついて語られないことを論じている。さらに、保育者のかかわりについては、子どもの行動に隠された心もちを受け取り共感することに倉橋が重きを置いていたことを示している。

第 3 章では、ノディングズのケアリング論を視点とし、倉橋の保育思想における道徳教育のスタンスを発展的に捉え直している。関係論的な人間観に立つノディングズのケアリング論と、他者と共感的にかかわり合って「人間性」を涵養することを重視した倉橋の保育思想に共通性を指摘している。それは、子どもを“よくなろう”とする存在として信じ、行動のみを見て客観的に判断することを避け、一人の人として相手を知ろうとする、人間理解に通ずる共感の重視である。彼らが個体能力主義的な道徳判断の発達段階理論とは異なる立場に立つことを確認し、人間理解の共感的まなざしで子どもをまなざすということは、「倉橋でいえば子どもの心もち、ノディングズでいえば最善の動機を見出すために他者を知ろうと対話的

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

に探究し続けること」であると論じている。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部の議論を踏まえ、幼稚園の4歳児クラスで縦断的に行われたフィールドワークを通して、保育の場における対人葛藤について具体的なエピソードから検討している。第4章では、1学期の関係の始まりの時期について、二人の子ども（シュンとミユキ）の生活において生じている対人葛藤に焦点を当て、彼らが生活を作る過程と、そしてそこにある保育者のまなざしについて論じている。シュンの生活における対人葛藤のエピソードでは、その場の対人葛藤を解決することよりも彼らの関係性に「少し光が差す」ことを大切にする保育者のまなざしに支えられながら、子どもたちがありのままの存在として受け入れられ、関係が築かれた様子が描き出されている。ミユキの生活における対人葛藤のエピソードからは、倉橋の保育思想において対人葛藤が「自発性」の現れとして考えられていたように、保育者は子どもたちが幼稚園で自分らしく生活できることを願い、そのまなざしに支えられながら子どもたちの間でうれしいかかわりが広がっていたことを示している。これらのエピソードでは、他者とのかかわりの中でどのように在るのかを子どもたちが生活の中で模索する上で、対人葛藤が起こってきていたと論じている。その人自身に注意を向け共感的なケアリング関係を構築し、そして子ども自身が「自発性」を発揮し自らの生活を作ることを、保育者が大切にしていたことを示している。

第5章では、2〜3学期の関係の深まりの時期について、そこで二人の子ども（ソウタとカナコ）が、対人葛藤を伴いながらも周りの人たちとの関係性の中でどのように生活を送っているのかについて語られている。ソウタの生活では、彼が不満を訴えることができるようになったことの現れとして対人葛藤が生じていたことが示されている。それは誰かに心を寄せてもらったり、状況から少し離れたりする中でほぐれ、相手との関係を結び直すかかわり合いへと転換していたことが論じられている。カナコの生活では、相手とのつながりを確かめるために他者へ期待する行動を求める中で対人葛藤が生じていたことが示されている。ぶつかりながらもかかわり続ける子どもたちは、「他者」ではなく「遊び」に重点が移る中で、さまざまな関係性へとひらかれていった。一人ひとりが具体的な他者として大切にされる風土と、これまでのうれしいかかわり合いの歴史の中で、葛藤の最中であっても相手を大切に思いかかわり合う子どもたちの姿や、葛藤の当事者らに寄り添い辛さをケアしようとする周りの子どもたちの姿が見られたことが明らかにされている。

第6章では、第4章と第5章の議論から、子どもの生活における対人葛藤の実際について整理されている。子どもたちの「自発性」の現れとして生じた対人葛藤をそばで支える保育者が、人間理解の共感的まなざしを通して、お互いの弱さや不完全さを受け入れて生活できるような関係を築こうとしていたことを論じている。そして、そのようなまなざしに支えられながら、状況依存的に作り出される「遊び」を通して、子どもたちが自分の生活を作り、他者と関係を取り結んでいたことが述べられている。終章では、「道徳」、「発達」、そして「教育」について、本書の議論をさらに進めている。「発達」を「ケアリング関係の構築」と捉え、「教育」を「他者を知ろうとする共感」によって構築するものと考えられることを示し、保育者の専門性についてさらに踏み込んで検討した内容となっている。

保育の場では、いろいろな人の思いや考えが入り混じり、どれひとつとして同じではない対人葛藤がいくつも起こる。著者は緻密なフィールドワークにより、幼稚園児の他者との細やかなかかわり合いや保育者のあたたかいまなざしを描き出している。本書は、保育の場で他者とかかわり共に遊ぶ中で少しずつ変容していく子どもたちの関係性を繊細に捉えて記述しており、幼児教育や保育、遊びの意義を問い直す上で重要な議論を展開している。また、本書は幼稚園をフィールドにした対人葛藤について焦点を当てているが、ここで倉橋とノディングズの思想を基に論じられている内容は、他者とかかわりながら生きるとはどういうことなのか、という根本的な問いを私たちに再考させる。本書の事例と議論は、倉橋が「弾力」と表現した、子どもたちが力強くも柔らかくぶつかり合う様子を彼らの生活の中で捉えており、他者との関係性の中で生きる私たちにその意義を示してくれる。保育や幼児教育の関係者をはじめとする、幅広い読者が本書を手にすることを期待する。